

十一 広島文教女子大学の施設

大学令に拠る 地方の最高学府の機関としては、やはり短大だけでは十分ではないので大学までは創りたいと思つていたが、いちおう大衆の望まれる短大をだいたい整えてからと思つていたので、前述の如く、**文学部新設**

短大は四学科二専攻までにしたから、ここらあたりから大学設置の方向へと考えていた。

そこで私は、私の専門の家政学科を設置しようと思ひ、その下準備のために色々とあたつてみたが、どうも教授陣を整えるのに難色があるので苦慮していた。そこで、この方は時間をかけて整えることにして、教授陣の整えやすい文学部を先に設置し、次の家政学部を設置することにした。そして、その準備に取りかかった。

校地の物色 これは、今までの短期大学の学科増設のようなわけにはいかない。一つの学部を創るのだから、土地の物色と**購入** 地、校舎、内部設備、図書および図書館完備が大事である。

まず第一に、土地購入である。その土地の物色にあちこち見て廻つた。八木峠に四万余坪の広大な土地があるからと、佐東町の町長さんと助役さんとで誘致に来て下さつた。そのとき、私は場所としては最適な所だと思つたが、何

しろ四万余坪という広い土地を求めるほどの資金がなかったのである。造成費を加えれば四億もの金を作るだけの肝もなかった。

それは、いつもの如く石橋をたたいて渡る主義なので、借金するにしてもはつきりと近い将来払える見込みがたかねばしないという生き方の私なので、どうしようかどうしようかと思案しているうちに、可部町長から上原の土地を世話をするから可部町に大学を創りなさいと言つて来て下さった。

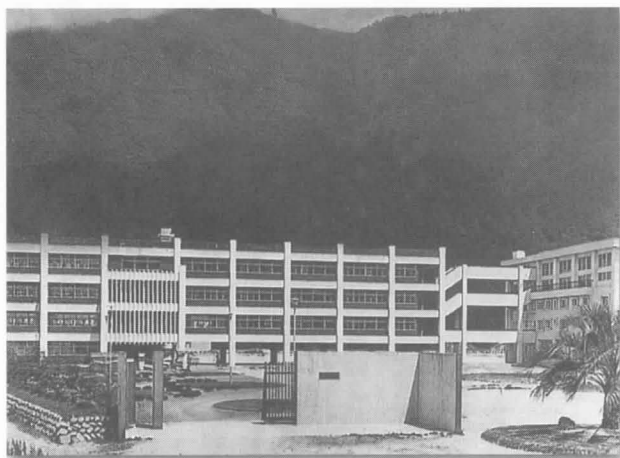
広さもちようど一万七千坪くらいで手ごろであるが、場所としては八木峠の方が遙かに良い。

一方、高校や短大の所在地が可部であるので、どうしたものかと、色々迷ったあげく、上原に決めた。そして購入に着手したのが三十九年十二月からである。農地転用の許可が終わったのが、四十年四月であった。一部の者の未登記もあった。それは、地主が米国にいる人、替え地を要求され、その替え地が気に入らない人等々、なかなか容易にはいかなかったが、ぐずぐずしていたのでは間に合わない。未解決の土地の地主はI氏であるが、それはそのままにして校舎を建てることにした。

校舎新築

校舎は、鉄筋四階建てと三階建ての一〇三七坪が、四十一年（一九六六）三月三十日竣工した。

文部省設置認可申請は四十年九月末に提出し、同年十一月十二日



広島文教女子大学開学当時の上原校舎 1968年

と十五日の二回にわたり、大学設置審委員と私大審委員が現地審査に来校されたときは、校舎はまだ鉄筋を打ったばかりであったが、工事行程に三月中旬完成となっていたのと、砂原格先生が同席下さって色々説明を加えて下さったので助かったのである。図書等については、別に心配なく通過したのだが、校舎の完成が一番に心配であったが、開学には充分間に合って助かった。

この校地購入費と校舎建築費の資金づくりも、並大抵ではなかったが、運用財産の売却費並びに地方金融機関からの臨時借入れ、神原理事からの援助などで、何とかできた。思うに、老いた女性の私を信用して融資して下さいことに、感謝せずにはおられない。

過勞から

三十六年短大新設以来、ほとんど毎年の如く学科増をし、四十年には大学の学部新設までまった

カリエス再発

く無我夢中でやってきた。文学部設置の現地審査も無事に終わったので、例の如く文部省各係官と審議委員の方々へのお礼のため上京した。

各課、各部門を廻って後一日という日から腰が痛みはじめて、東京での最後の日には、腰を両手で支えて歩いて予定の用件は何とか済ませて夜行に乗り、帰広するなり全然動けなくなった。ちょうどカリエスを患ったときと同じ症状であった。

吉永病院長の診察の結果、カリエスの再発の兆候があるとともに、腎臓に病気がきているかもしれんので、総合病院で診察を受けるようにとのことであったので、さっそく、広島大学の附属病院に入院して精密検査を受けた結果、腎臓にはきていないが、カリエスは全治するものではないので、身体の衰弱に伴ってカリエスが出て来たのだから、まず身心を安静にして、衰弱の回復に努めることが第一だということだった。四十日ほど病院で衰弱の取り戻しとカリエスの養生に努め、年末に退院して、家庭において七カ月ばかりギブスベットの中での闘病生活をしたのだが、思っ

たより早く良くなって、四十一年七月には起き上がることが出来たのである。

周囲の者は、カリエスの再発と聞いて、もう今度は駄目だろうと思っていたらしいが、私は死ぬなどとは全然思ってもみなかった。まだまだ自分の仕事はこれからだ。ようやく長年の希望であった大学設置の認可をいただいたばかりなのだから、これから地方の文化向上を一段と高め、広めていかなばならぬ時なのだ。一日も早く起き上がらねば。と、一生懸命養生に努めた。

校名の変更

短期大学までは、校名は地名をとって「可部女子短期大学」としていたのだが、大学ということになると、今度は地名をとるにしても範囲を広げて広島を入れた方が良くということになった。広島女子大学というのは県立があるので、この地域が文教の地域なので、その「文教」を入れて、広島文教女子大学と名づけたのである。

広島文教女子大学文学部設置申請の認可は、四十一年一月二十一日に下りた。いよいよこの地に、最高学府の機関設置が許されたのだ。大学教育の大使命を十二分に果たす教育を行うことに、一段と強く覚悟と決意を固めたのである。入学生は国文学科が二十一名、英文学科が二十名の四十一名であった。開学式は四月十五日である。島根大学を同年三月に御勇退された古川尚雄先生を文学部長として迎えることにした。古川先生は他からの誘いも沢山ある中を、我が校に是非にと無理を願っておいでをいただくことにしていた。先生は、開学二日前においで下さり、私方の裏座敷にお泊まりいただいて、開学式を待つて下さった。

広島文教女子

大学開学式

私は前述の如く病床にあったのだが、やや快方に向かってもいたし、また永年の願望がかなった大学開学式なので、途中で倒れても出ねばと思ひ、元気を出して式場に臨んだのである。開学といえども私は病気の身であるので、他には御案内もせず内輪で行ったのだが、文学部の教授陣はもちろん、

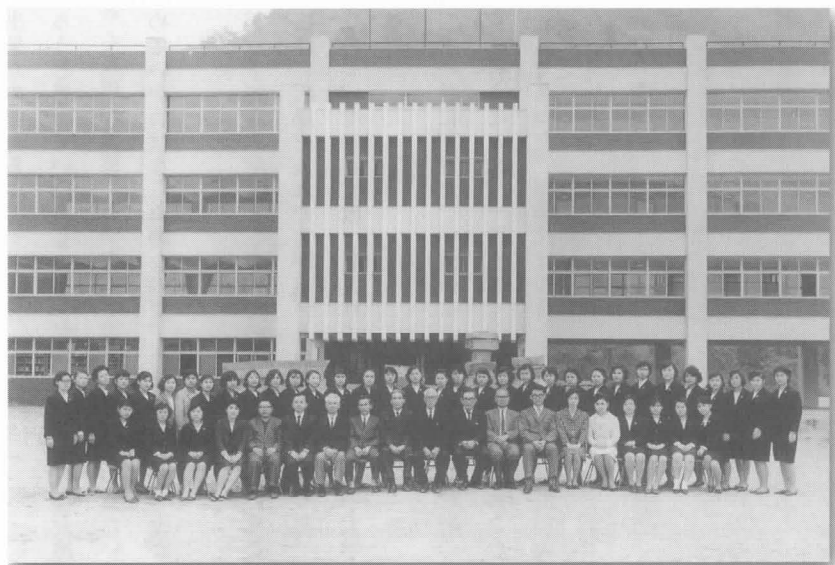
短大部の教授連も御列席下さり、なおかつ父兄もはるばる全員御出席下さって、厳肅にめでたく執り行うことができた。

杉本直次郎先生
のお言葉

式が終わって学長室に戻っていたところへ、杉本直次郎先生がお入

り下さって、涙を流して私の式辞に感激され、「学園創立十八年目、大学開学の今日までの苦労は大変であっただろう、よくやりました。これからどうか頑張ってくださいよ。」と犒はなむけいと激励をして下さった。今も忘れられない嬉しい有り難いお言葉である。こうして杉本先生のことを書いてみると、先生のお姿が目に見えて懐かしさがこみあげてくる。

先生は、開学から二年余り広島の地におられたのだが、京都にお帰りになり、その後は年二回の夏と秋に集中講義に来て下さっていた。お年は八十歳になられるのに心身共にお元気で、いつ御来学下さっても、熱心に大きな声で学生によく解るように講義して下さい、休憩のときには色々と私に話をして下さっていた。私も色々と勉強



広島文教女子大学1期生の入学記念写真 1966年

になるので、楽しみに聞かせてもらっていた。先生は、教員住宅にお泊り下さっていたのだが、天候が良くても悪くても、毎朝上原の神社にお参りになり、石段二五〇段を登り降りされることを日課とされていた。それは足を鍛える意味に於て。健康上には十二分の御注意と努力を払っておられた先生が、昨年夏の一週間の講義を終えて七月十九日に御帰京なさったのに、九月三日には亡くなられた。七月十九日がこの世での最後のお別れとなってしまったことは、何としても悲しい限りである。

人の命のはかなさをつくづく感じる。

四十一年度の ◎文学部発足初年度の状況

各部門の状況

入学生は定員以下の四十一名であった。この程度の人数は、学問を究めるためにはちょうど良い。個人研究・個人指導なども徹底が期せられて、大学教育の使命を果たす上には理想の人数であるが、ただ私学は、学生の納入金をもって経営するのがだいたいの建前なので、経済面においては苦労がある。しかし、経済経営は苦しくても、最高の学問の府であることを基本において、大学教育の使命を果たすことに重点を置きたいと思う。

それには、学ぶ学生自身がその十分なる覚悟と決意を持ち、大学教育と取り組んでやろうとする熱意と意欲の旺盛な学生のみを受け入れ、学問の土台となる人間性の陶冶に力を入れるというのが本学教育の理念なのだから、数にはあまりこだわらず、この主義でゆきたいと思う。

◎短大の現状

短大においても然りである。短大創立五年目なので、本学短大の評価も高まり、且つまた広く認識されてきて、各地の進学校からの応募者も質量とも段々と増加してきた。鳥根、山口、鳥取、愛媛、九州辺りからの応募者が多い。年々進学率も上昇してきたのと、この年あたりからベビーブームのときの子供たちが大学進学学期に入ったので応募



広島文教女子大学長時代 1971年

者が多く、開学以来定員厳守をしてきたのだが多少定員オーバーしたので、四学科二専攻、総員四八一名となった。

◎附属高校の現状

この年あたりからはベビーブームの生徒が段々と減ってきて、前年より二百名近く減となって総数一二三〇名となった。昨年（昭和四十年）、教室の必要に迫られて無理をして建てたけれど（第四校舎）、将来は必要がなくなるのではないかと思う。

◎寄宿舎の現況

四十年は高校の舎生が三五九名であった。これだけの者を収容する宿舎は、三十四年に中島校地内へ建てた（三一五坪）寄宿舎である。それは八畳間二十室、十畳間二室、それが正式の寄宿舎であったが、これだけではとても収容しきれないので、小講堂を臨時改築して八畳間十四室、さらに三十三年度に臨時的に簡単な音楽室として五間に八間の建物を造っていたのが不用となったので、これを改造して八畳間八室、さらに生活実習室（短大設

置の際、建てたもの）六畳間三室、八畳間二室、三畳間一室、さらに私の住宅八畳、六畳各一室に各々収容して、舎監は本校卒業生六名を依頼し、舎監長の役目は私なので自ら先頭に立ち、朝な夕な指示指導に当たっていた。

食事の方は、学園創立当初の主旨である現物持参（米、野菜、その他食品何でも）だが、寮生宅は大半が農家なので時価で計算していた。炊事はこれも前述のとおり、教育即生活という意味から、初めから寮生が輪番で（六、七人で）やるのである。

当番は、朝四時半起床。まず七つの平釜に、一番釜として五つは御飯（これは昼の弁当）、二番釜の五つは朝食、朝食の御飯が出来ている間に弁当を入れる。二つの釜に弁当のおかずを煮る。もう一つの釜では朝の味噌汁というように、七つの釜を二回にわたって使い、昼食と朝食を作るのである。舎監の先生には、こうした寮生活をした卒業生に勤めてもらうことにしていたので、炊事の指導も、寮生活の指導も、自分たちが通ってきた道なので、何かと十分に心得、体験してきているので、円滑に行われていた。寮生たちも先輩であり先生であるので、現在の寮生たちよりも、はるかに心身は労していたけれど、何にも不平も不満も言わず、先輩の舎監の先生たちと楽しく且つまた意義深い毎日を送っていた。

この時点において、大学生の寄宿舎として学寮を創るまでには手が廻らなかつた（資金の問題で）ので、三十二年の火事の際の焼けた材料を使って、三十五坪の二階建ての小さな粗末な建物を大学の寄宿舎に充当した。わずかに十余名しか収容できないので、学外に二カ所ほど元大和重工の社員寮だった建物を借り受けて、これに四十余名を収容していたのである。大学寮生は、初めは寮に寮にと行って入ってきた者が、途中で下宿をするといつて寮を出る者が段々あって、年間でいくらというところで借り受けた建物なので、年度の途中で出られては家賃も払えなくなる始末であった。

寄宿舎新築 第一期工事

本学園寄宿舎は、高校も大学も粗末な臨時的建物である上に、誠に狭隘なので、この対策に迫られていた。大学名義なら住宅金融公庫で借入れが出来るということで、建てることに決心して四千万円の借入れを申し込んだところ、申込額どおりの金額を貸与してもらえなくなった。

もちろん、自己資金は建築費の三五%出して、四十一年九月着工して四十二年三月二十九日に、一三三三二平方メートルの宿舎および管理棟が竣工した。これは大学寮として借入れをし建築したのであるが、一部高校生にも使用させることにした。

寄宿舎第 二期工事

大学生と高校生とを一緒に收容すること
は、教育上種々の支障が次々と出てくるので、一年後には、これではどうにもならぬということで、またまた住宅金融公庫に第二回の借入れができるかどうかを伺ってみたら、三千万円くらいはまだ融資できる(学科、学生数などを基本としての計算)ということなので、重ねて借金を背負うことは辛い思いがしたけ



寮の前で記念撮影(左 高校寮、右 大学寮) 1968年

れど、遠隔地より親元離れて来ている寮生に、温い家庭的な和やかな環境と雰囲気の中で生活させて、学問に精神の修養に専念させたいと考え、思い切つて借り入れすることにした。そして自己資金の仕度をして、第二の寮をやはり鉄筋三階建て十畳の間四十二室、和室六畳の間四室、屋上保健室八畳、六畳二室、計二七〇〇余平方メートルの第二寄宿舎が竣工した。この建物を大学寮専用として、前年度建築したのを高校寮に充当した。

大学図書館新築 大学の図書館には会議室を一時使用していたのだが、文部省に提出した大学設置認可申請時の計画書に四十二年度中に図書館を建築することにしていたので、経済上では色々困難であつたけれど、私学

振興会より借り入れをして、図書館と大講義室と学生ホールの三用途の目的で、鉄筋三階建て一三三余平方メートルを建築した。

この建設で、大学教育の施設としてはいちおう完成したので、学生たちも教職員も大変喜び、図書館の利用度も高くなつてきた。借金の苦勞はしたが、学生生徒たちが喜ぶ顔を見ると、苦勞はどこかへ飛んでしまうのである。

私の送り迎える毎日、唯々生徒、学生、学校、そして教育だけに生きている。